

## 中園和吉と『日露観』

豊 後 宏 記

## はじめに

中園和吉は、安政三年（一八五六年）、肥前多久（現在佐賀県多久市）の士分の家に生まれた。数え年十二のときに幕府の瓦解に遭い、その後特に名を顕すことなく市井の人として世を送り、大正十年（一九一六年）に満五十九歳で没した。『日露観』は、明治三十七年（一九〇四年）日露開戦の直後に、和吉が日露の戦役について、自らの見解を漢文によって著述したものである。ただ、和吉存命中も、またその死後も公にされることなく、草稿のまま遺族の手によって保管され、現在は和吉の孫にあたる中園照彦氏が所蔵されている。

明治における學術、文芸の發展に、江戸期の漢学教育の普及が大きく寄与したことは、贅言を要さぬところであり、明治の漢学の水準が、なお相当のものであったことは、すでに大方の指摘されるところである。しかしながら、明治の漢学の状況については、詩に関する研究が専らであり、文について論じられることは少ないようである。また、とりあげられる詩しても、その多くは著名人の作であり、当時の一般的な漢学の水準が、どの程度であったかを窺うことができる資料は、ごく乏しいように見受けられる。

拙稿では、明治の漢学の一般的な水準を示す好個の資料として、中園和吉『日露観』について紹介してみたい。

## 一

『日露観』は、罫紙（四周双辺、有界、半葉十行、単黒魚尾）に書かれた、和吉の自筆稿本。袋綴にして、二つ折りにした

硬紙で挟み、仮綴してある。ただ、別に四針眼の痕跡があり、最初は線装本の体裁を試みたようであるが、十六葉という紙数では線装とするに具合が悪く、綴じ直したのであろう。

標題については、表紙に和吉の筆跡で、「明治三十七年 征露観 文化遺訓」と直書きされており、本文巻頭内題にも「征露観註釋 中園和吉書」と記されている。ただし、その欄外に、

征ノ字日ノ字ニ代フ○日

征者上下ヲ伐ツ。敵國ハ相征セサルナルト云フ語アリ。故ニ最初非常ニ考ヘテ日露觀ト題セシモ面白カラス。依テ征露トセシモ如何ニモ穩ナラズ。故ニ日ニ代ヘントス」(句読点、豊後。以下引用文同)

と注記されており、さらに、首目に相当するものを綴じ直し、「標題變更理由」として「征者上下ヲ伐ツ」以下の文言を記しているの、拙稿ではこれに従って、「日露観」の標題をとった。

本文は漢文、まれに読点、豎点や、ふり仮名、圈点、傍点が付されている箇所もあるが、ほとんどは白文で書かれており、二千四百六十九字と、漢文としてはかなりの分量である。また、小字双行で、一万四千字余りの和文の自註を付す。ただし、通常の註とは異なり、語釈などよりもむしろ、本文の訳文や自己の見解を述べたものが大半を占めている。表紙の「文化遺訓」の語句から察するに、児孫に遺すことを配慮して付けられたものではないかとも思える。

奥書に、

附託 眼病ノタメ筆端ヲ辨セス。誤脱ノ字アラン。其心アレ。意味ノ貫徹セサル所アラン。後日は正スベシ。古事古語ハ記憶ニ取り他書ヲ閱覽シタルニ非ス。本文註解皆然リ。

明治三十七年日露開戦前

中園和吉書

とある。和吉はこの時四十七歳。「眼病ノタメ」とあるのは、老眼はもとより、当時の一般的な老いのすすみ方から考えて、白内障の弊もありえたのではないかと思われる。「古事古語ハ記憶ニ取り他書ヲ閱覽シタルニ非ス」というのも、漢学者好みのやや誇張された常套句とはいえ、やはりいちいち文献を閲するのは、難しかったのであろう。ただ、本文、註ともに、文字の誤脱はごく少ない。

奥書には月日が記されておらず、ただ「明治三十七年日露開戦前」とのみあるが、本文中には「我皇赫爰煥發宣戰之大詔。

謹而奉讀之、教旨灼乎如日月」と、既に宣戰詔書が発せられているように書かれており、時間的な齟齬が生じている。あるいは、『日露観』を書き綴っている最中に、二月十日の開戦を迎えたのかもしれない。少なくとも『日露観』は、明治三十七年の宣戰布告前後のごく短い期間に執筆されたと考えられよう。

## 二

『日露観』は、内容的には当時の輿論を反映した主戦論であり、本文、自註を併せ読めば、また時代の雰囲気を感じ取ることができる。興味深い資料と言えるが、拙稿では内容にまでは触れず、文章についての議論しておく。今回は紙数の関係で全文を示すわけにもいかないので、冒頭と末尾をとりあげることとする。なお、参考として訓読を付しておく。

天の生斯民也、與之基而、令設相生相食之道而無互相侵害焉。是故人各得其所而身命以全矣。

甚矣哉露之不仁也、擅橫奪人之國而不知恥。恣剽竊人之財而不知厭。暴戾浮於桀紂、吞噬猛於豺狼、驕傲尊大傍如無人。虎視眈々睥睨宇內、鸞旗翻々震駭寰宇焉。獨佛者戰々而窺其鼻息、塙伊者競々而避其鋒銑。列強窮態其如是。其他孱弱者可知耳。

【訓読】天の斯の民を生ずるや、之れに基を與へ、相生相食の道を設けて互に相ひ侵害することなからしむ。是の故に、人各おの其所を得て、身命以て全ふせり。

甚しきかな 露の不仁なるや、<sup>はしま</sup>擅に人の國を横奪して恥を知らず。<sup>はしま</sup>恣に人の財を剽竊して<sup>へうぜつ</sup>壓くことを知らず。暴戾なること桀・紂を<sup>こ</sup>浮へ、<sup>どんぜい</sup>吞噬すること豺狼よりも猛く、驕傲尊大なること傍に人無きがごとし。虎視眈々として宇内を睥睨し、鸞旗翻々として寰宇を震駭す。獨・佛は戦々として其の鼻息を窺ひ、塙・伊は競々として其の鋒銑を避く。列強の窮態其れ是のごとし。其の他孱弱なる者知るべきのみ。

嗚呼、古之興者、在德厚薄、而不在大小也。今也、民心向脊其如是、則昊天佑我之至仁、而<sup>カ</sup>膺彼至不仁。終局之利亦其在我也。不俟卜筮而後知也。偉哉、成德大業、嗚呼、又盛哉。王者之師前途尙遼遠也。舉国一致、堅忍持久、豈其可不努哉矣。(ルビ、原文)

【訓読】ああ、古の興る者は、徳の厚薄に在りて、大小に在らざるなり。今や、民心の向脊すること其れ是のごとくなれば、

則ち昊天我の至仁を佑けて、彼の至不仁を膺<sup>かう</sup>たん。終局の利も亦其れ我在るなり。卜筮を俟たずして後知るなり。偉なるかな、成徳大業、ああ、又盛んなるかな。王者の師前途尙ほ遑遠なり。舉国一致、堅忍持久し、豈に其れ努めざるべけんや。

日本人が漢文を作る場合に、最も大きな弊害となるのが助字と用語の問題であるが、『日露観』では助字は概ね正しく用いられているようである。もつとも、多少の難点も見られ、「其他孱弱者可知耳」は、「獨佛者戰々而窺其鼻息……」以下を受けて、「其他孱弱者以可知耳」と「以」の字を入れたほうが意味的にも適切で、語調も良いように思われる。「民心向脊其如是」「終局之利亦其在我也」の「其」や、「豈其可不努哉矣」で「哉矣」と二字を重ねているのも、文法的には問題ないものの、ややくどい表現である。用語について言えば、和製漢文の場合、漢学の素養に乏しい作者によく見受けられる、熟していない自己流の語句や和製漢語を用いるといった弊害があるが、『日露観』においては典拠のある適切な語句が使われている。

古典からの引用も、まま見られる。「古之興者、在德厚薄而不在大小也」は、本来『後漢書』鄧禹伝の「古之興者、在德厚薄、不在大小也」に拠ったためであろう。「十八史略」は元の曾先之が著した初学者用の歴史教科書であるが、わが国においては明治になって大人のための中国史書として、非常な流行をみた。おそらく、和吉もこれを愛読していたものと思われる。「今也、民心向脊其如是、則昊天佑我之至仁、而膺彼至不仁」は、『孟子』尽心下の「仁人無敵於天下。以至仁伐至不仁、而何其典之流血杵也」にもとづいている。『孟子』においては、「至仁」「至不仁」はそれぞれ周の武王と殷の紂王を指しているが、ここでは当然、日本と露国の喩えとして用いられているのである。

ちなみに、古典からの引用として、『日露観』には『論語』からのものが三例見られる。「是之可忍、孰不可忍矣」とあるのは、八佾篇「孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也」から引いたものである。次に挙げるものは、自註において詳細な解説を加えている。(括弧内自註。ルビ、原文)

語云、四海困窮、天祿永終焉(語ハ『論語』。其第十ノ卷ノ下篇堯曰第二十ノ篇ノ始メニ、堯ノ曰ハク、吁、爾チ舜、天ノ歴數爾ガ躬ニ在リ。四海困窮セハ、天祿永ク終ヘント仰セラレキ。云フハ、堯帝四十九人ノ御子在シ在セシカナレドモ、天下ヲ治ムルニハ德ニ非レハ治マラズ、德ハ孝德ヨリ大ナルハナシ。天下ノ廣キ求ムルモ孝德舜ニ勝ルハナシトテ、自分ノ御子ニ捨イテ、舜ヲ歴山ナル畎畝ノ中ニ舉ケ、位ヲ讓リ玉フテ仰セラルル右ノ如シ。四海ノ廣キヲ治ムルニハ、自身ノ

心ヲ以テ天下ノ心トナスニ非レハ能ハズ、人民困窮スル如キ政治ノ仕方ニテハ、永ク帝位ヲ踐ミ、四海ニ君臨スルコト出来ナイ。宜シク喜怒哀樂ヲ天下ト共ニスベシ。ト仰セ玉ヘリ。自分ヲ御子ニ譲ラセラズ他人ノ子ヲ擧ケテ四海ノ君トナシ、斯クモ慇懃懇篤ナル至言ヲ以テセラル。堯帝ノ蒼生ヲ恤レマセラル其至心誠意、萬世ノ下、神人共ニ感嘆シテ嗚咽欽仰措ク所ヲ知ラス。其後世孔聖、仁義ノ教ヲ布クニ当リ、堯舜ノ二帝ヲ祖述スル素ヨリ其所ナリ。○此所ニ是ノ語ヲ引用スルノハ爾露國四海困窮セハ天祿永ク終ヘント云フコトアリ。

自註で述べられているように、堯曰篇「堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮、天祿永終」からの引用である。多久は、東原庵舎を設けた第四代多久主多久茂文が、宝永五年（一七〇八年）に多久聖廟を建立したことに由来して、現代に至るまで『論語』教育が盛んな土地である。和吉にとつても、『論語』はすでに自家葉籠中のものであつたのだろう。字句に多少の異同があるのは、「古事古語ハ記憶ニ取り他書ヲ閱覽シタルニ非ス」ということであらうか。ただし、「爾今而俊改復正則可也」の自註にある「何トナレハ、過ツテ改ムル、之レヲ過チ云フ、トナレハナリ」は明らかに書き誤りである。これは衛靈公篇「過而不改、是謂過矣（過ちて改めざる、是れを過ちと謂ふ）」を引いたものであり、「過ツテ改ムル」と肯定文にしよう、本文の「爾（露國）今にして俊改して正に復さば則ち可なり」と矛盾しよう。

さて『日露観』は、本文全体を通してみても、対杖を用いた、よく整った文章である。対杖について言えば、先に挙げた冒頭、末尾においても、「擅横奪人之國而不知恥。恣剽竊人之財而不知饜」の「知」のいずれか一方を、「覚」などの字にかえたほうが、バランスがよいといった程度の取しかない。何よりもまず、二千四百字を越える長文を、恐らくごく短い期間で書き上げたのは、見事な筆力と言えるのである。

『日露観』には一篇の詩も載せられていないが、和吉は詩を作らなかつたのであろうか。『日露観』には本名のみが記されており、号の類はまったく見えていない。和吉の漢学趣味が普段の生活にまで及んでいたであろうことは、子供の命名の仕方からも伺われる。長子「彪」<sup>こと</sup>、次子「虬」<sup>なげし</sup>と同一傍の一字を用いているのは、「蘇軾」「蘇轍」のような中華風の命名法を意識したものであろう。およそ日本人で漢詩を作る者は、ごく普通の慣習として雅号をつけた。和吉の性格からして、作詩に勤しんだのであれば恐らく雅号を用いたであらうし、『日露観』にも雅号を記したのではなからうか。和吉の遺品中には、『日露観』以外に、いかなる漢詩文も残されていない。『日露観』のような文を作った人が、詩の一篇も遺した形跡がないのは、些か不思議ではある。

## 三

和吉の生まれた多久は、肥前鍋島藩において、大配分と呼ばれる准支藩的な自治領であった。鍋島藩が士分に対して厳格な義務教育を課していたことは、その藩校弘道館の名とともに有名であるが、多久もまた東原庫舎と称する邑校を設け、整備された教育制度を実施していた。江戸期多久の教育制度については、多久市史編さん委員会『多久市史』第二巻「近世編」(多久市、二〇〇二年)第七章「多久領の教育と文化」に詳しいが、同章の八〇四頁に掲載された『御屋形日記』の図版中(第23図)に、中國和吉の名前が見えている。この図版は、多久出身の著名な電気工学者志田林三郎(一八五五―一八九二)についての記述に関連して掲載されているもので、文久三年(一八六三)から翌元治元年までの一年間、定め日数を越えて出席した精勤褒美の記事である。志田は二百六十六日、和吉は二百四十八日とある。『多久市史』によれば、東原庫舎にはまた、上田町学舎、笹原学舎、志久学舎があつて、これらは「年少生徒ゆえに本校に通学することができない者、あるいは貧しくて本校に寄宿することができない者など」のために設置されたものである。元治元年に和吉は数え年九つ、居住地の東多久から多久南郊にある東原庫舎までそうとうの道のりがあるから、「年少生徒」ということで上田町学舎に通学していたのであろう。志田は町民身分であつたため上田町学舎に学んだが、学業極めて優秀ということ、慶応二年(一八六六年)数え年十二で東原庫舎に進んでいる。多久も佐賀本藩と同様に、士分に対しては八歳から二十五歳まで義務教育を課しており、和吉も当然、東原庫舎に進んだと思われるが、東原庫舎における和吉の消息については、未だ知りえていない。ちなみに、東原庫舎は明治二年(一八六九年)に多久郷学校と改称、さらに同四年には多久小学校と改称された。

明治以後の和吉の履歴についても、なお明らかでない。これは、和吉の長子中園彪氏と次子中園競氏が早くに台湾に渡られ、その間に和吉が没したからであり、彪、競両氏とも、すでに他界されて久しい。競氏のご子息、和吉の孫にあたる中園照彦氏が、御父君から伝えられたところによると、和吉はまったくの独学で、私塾を営んでいたということである。しかしながら、漢学に限って言えば、独学のみで『日露観』のような長文を物すほどの力は養えないのではなからうか。『日露観』を見るに、和吉の漢学の素養はかなりのものである。恐らく成人して後も、独り研鑽を続けていたのであろうが、たとえそれが独学であつたにしても、幼少年時に施された漢学の基礎があつて初めて、それは可能なことであつたように思われる。

戸籍に登録された「和吉」は幼名であることからして、元服して名乗りを用いることはなかったのであろう。「戸籍法」は

明治四年（一八七一年）に布告され、翌明治五年二月一日に施行された。和吉はこの時、数え年十六。佐賀の例で言えば、本藩の江藤新平のように、通称を戸籍名としたケースもないわけではないが、やはり名乗りを登録するのが多かったようである。

### むすび

和吉は漢学についてかなりの素養を備えていたようであるが、けっして和吉のみが特殊だったわけではない。先に、佐賀藩や多久領の整備された教育制度について述べたが、江戸時代にはほとんどの藩は同様な藩校を設け、子弟の教育を行っていたし、漢学の水準においては、地方といえども中央にひけをとらなかつた。例えば、佐賀の隣国である豊後日田にあった廣瀬窓（一七八二―一八五六）の私塾「咸宜園」は、門弟実に四千人を越えたという。しかし、江戸期に教育を受けながら、幼少年期を幕末維新の混乱期のうちに過ごしたものの大半は、和吉のように、それらを活かすことなく市井のうちに生涯を終えた。しかし明治の學術、文芸は、和吉のような人々によって支えられ、発展していったと言えよう。

以上、ごく簡単にはあるが、中園和吉の『日露観』を、明治期の漢文の一資料として紹介した。今回は、特に漢文のみに焦点をあてたが、和文で書かれた自註もまた、処々に言文一致体を思わせるような文章が見えており、明治人の国語力を考える上での興味深い資料と言える。機会があれば、稿を改めて論じてみたい。

拙稿を執筆するにあたり、中園照彦氏には、貴重な資料、情報等をご提供いただいた。とりわけ、上田町学舎での和吉の消息を知ることのできる『多久市史』の図版に関するご教示は、和吉の人物を知る上でたいへん有益であった。また、和吉の長子中園彪氏の孫にあたる本学教授、羽生義正先生にも、貴重な資料をご提供いただいた。この場をお借りして厚くお礼申し上げる。